「広島大学　欧米文化研究」第５号　1998年

エミリ・ディキンスン『第１詩集』の改変

稲　田　勝　彦

はじめに

筆者は，Emily Dickinson がどのようにして詩を書きまた推敲したかという，いわば「創作の軌跡」を明らかにするために，彼女が詩の草稿に記入した代替語句等の形態や意味を分析して，そこに働いていると思われる詩人の言語的・心理的・思想的要因を考察してきた。(稲田,「創作の軌跡」１，２，３）　本稿は，その一環として，ディキンスンの死後，1890年に，Mabel L. Todd と T. W. Higginson とによって編集，出版された最初の詩集 *Poems by Emily Dickinson*（以下『第１詩集』と略記する）に見いだされる編者による改変を検討し，改変がどのような基準にもとづいてなされたかを明らかにしようとするものである。

『第１詩集』の出版事情，編者による詩の改変の実態などについては，すでにヒギンスン自身や Thomas H. Johnson，R. W. Franklin らによってほとんど明らかにしつくされているといってよい。[1]従って，本稿の目的は，編者による詩の改変の実態そのものを明らかにするというよりは，それによってディキンスンの同時代人が持っていた詩の趣味や価値基準を推測し，これらの趣味や基準がディキンスン自身の詩作の過程にどのような影響を及ぼしたかを考えてみることにある。もちろんその背後には，ディキンスンが詩を書いたり推敲したりした時，彼女は当時の読者の趣味や価値基準を考慮にいれなかったはずはないという前提がある。フランクリンも，ディキンスンの詩集等に対する1890年代の書評集を出版する意義のひとつとして，次のことをあげている：

> 1890年代の書評家たちは彼女の同時代人か同時代人に近い人たちであり，彼らの期待の地平を彼女がまったく前提にいれなかったということはありえないことだ。彼女がそうした文学上の態度を受けいれたにせよ拒否したにせよ，それらは彼女の理想的な読者像形成に寄与したはずである。（フランクリン，*Reception*，xii）

本稿では，まず『第１詩集』改変の実態を明らかにし，次に改変例から編者がどのような意図と基準をもって改変をおこなったかを推測して，ディキンスンの創作過程との関連をみたいと思う。

Ⅰ．テキスト

本稿でいう『第１詩集』の改変とは，基本的に，『第１詩集』の中で，ジョンスンの *The*

Poems of Emily Dickinson（以下『集注版詩集』と略記する）で採用されている詩（採用稿）とは異なる語句，表記，表現等のことを意味する。[2]改変部分を特定するには『第1詩集』そのものと『集注版詩集』とを比較検討することが望ましいが，筆者の手元にあるのは *Collected Poems of Emily Dickinson: Original editions edited by Mabel Loomis Todd and T. W. Higginson*（1982）のみである。[3]これは『第1詩集』および *Poems of Emily Dickinson, Second Series*（1891），*Poems of Emily Dickinson, Third Series*（1896）の3冊の詩集を合本にして，しかもこれら3冊の詩集の中の詩すべてを「人生」「愛」「自然」「時間と永遠」とに分類しなおしたものであるので，どれが『第1詩集』の詩であるかを決定するのには役立たない。しかし，幸いなことに，『集注版詩集』では『第1詩集』に収録された作品が"PUBLICATION"の項で"*Poems*（1890）"と指示されているので，これを手がかりとして『第1詩集』の115篇の詩を特定することができた。"PUBLICATION"の項には，さらに『第1詩集』の改変個所と改変の内容も示されているので，これによって『第1詩集』の改変個所と内容を把握することもできた。

II．考察の対象から除外する改変

上述のように，「『第1詩集』の改変とは『第1詩集』の中で『集注版詩集』の採用稿とは異なる語句，表記，表現等のことをいう」と定義したとしても，本稿の主旨からいって，すべての異なる語句，表記，表現等が考察に値するわけではない。まず，次の4点に該当する改変は改変とはみなさないで，考察の対象から除外することとする。

1．大文字の改変

『第1詩集』では，詩の行頭の語および固有名詞等の頭文字以外の，ディキンスン独特の大文字はすべて小文字に変えられている。ディキンスン固有の大文字については，意味の強調などある程度の表現上の効果は認められるものの，その使用には一貫した法則はなく，特に顕著な意義を見いだすことは難しいと見るのが普通である。よって，大文字の小文字への変更は不問とする。

2．ダッシュの改変

『第1詩集』では，ディキンスン独特のダッシュも廃されるか，コンマ，ピリオド，セミコロン等に変えられている。ダッシュについては，サスペンスを生みだすなどの表現効果を指摘することが可能であるし，ダッシュの使用は『第1詩集』の編者ヒギンスンが言ったといわれるディキンスンの詩の「ぎくしゃくした（spasmodic）」感じと関連があるとも思われるので，これを廃することは必ずしも軽微な改変とは言えない面もあるが，これを個別に検討することは事実上不可能だということもあって，考察の対象からはずすこととする。

3．連分けの改変

『第1詩集』では，『集注版詩集』では連分けしていない詩を連分けしたり，連分けしてある詩を1連にするなど，連分けを改変したものがある。連分けの改変については，ディキンスン自身がかなり恣意的に変えたりしていることでもあるので，ここでは特に問題としないこととする。

4．斜体文字，感嘆符，疑問符，引用符やハイフンの改変

『集注版詩集』でイタリックスになっている語は『第1詩集』ではすべて普通文字に変えられている。一般に，斜体表記の第1の機能はその語の意味を強調することだが，ディキンスンも明らかに語の意味を強調するために斜体文字を用いた。従って，斜体文字の改変の意義も無視できないところがあるが，ここでは特に改変として分析の対象とはしないこととする。

『第1詩集』では，『集注版詩集』で用いられている感嘆符，疑問符が削除されたり加えられたり，あるいは，相互に入替えられたりされていることが多い。たとえば Some lose their way!] → Some lose their way.　I wish I were a Hay -] → I wish I were the hay!　Sweet] → sweet?　Alter!] → Alter? などである。疑問符は疑問文としての性格をはっきりさせる必要があると判断した編者によって新たにつけ加えられたものが多い。これに対して，感嘆符は約20～25%が編者によって削除されている。感嘆符の機能は詩の情緒性を高めることであるから，これを除いたということは編者がディキンスンの詩の過剰な情緒性を廃し，より落ちついた雰囲気を持たせたいと思ったからだと推測できる。感嘆符，疑問符の改変はこのような問題を含むが，これも改変には含めないこととする。

その他，『第1詩集』では，引用符を取ったり，today → to-day のようにハイフンをいれたりすることがあるが，これらも微小な改変として，考慮にいれないこととする。

『第1詩集』における改変のうち，上述の諸点に該当するものを除くと，『第1詩集』に掲載された115篇の詩のうち，編者による改変をまったく受けていない作品，すなわち『集注版詩集』と同一の作品は40篇（約35%）となった。編者によって何らかの改変をほどこされた詩は残りの75篇となる。

これら75篇の詩の中の改変のうち，次の4種類の改変はほとんど機械的に改変すべきものであるので，これらも考察の対象からはずしてもよいと思われる。

1．誤字の訂正：nescessity] →necessity, escutscheon] →escutcheon, sovreign] →sovereign，Van Dieman's Land] → Van Diemen's Land，Chrysophras] → chrysoprase

2．綴りの変更あるいは正常化：Jessamines] →jasmines, extasy] →ecstasy, blonde] → blond, it's] → its, your's] →yours, horses] →horses', wont] →won't, should'nt] → shouldn't, dropt] →dropped, thro'] →through, sh'd] →should, Wh'] →which

3．語法の正常化：（3人称単数動詞に“s”をつける）shake] → shakes；（名詞の数を変える）eye] → eyes, Creatures] → creature；（動詞の時制を変える）be] → is, are, was, begun] → began, Broke] → broken, wear] → wore

4．行の統合または分割：たとえば“Titled - Confirmed -/Delirious Charter!] → Titled, confirmed,-delirious charter!”（P-528）などは，4行連の詩であるのになぜかこの連だけが5行になっているのでこれを4行にして形式を整えようとした改変である。押韻などとも関係しないこのような改変は，特に意味があるとも思われないので，有意な改変とは考えないこととする。

もちろん，これらの改変についても問題がまったくないわけではない。たとえば，be] → is, are，was の改変である。ディキンスンは本来ならば直説法の be 動詞であるべきところにしばしば仮定法的“be”を用いた。それは，“And what a Billow be”（P-1052）の場合のように，押韻との関係からその必要性を説明できるものもあるが（それでもヒギンスンは苦労してこれを“What a wave must be”に変えなければならなかった），多くの場合は，不必要に変則的な用法だとして適切な形に改変された。しかし，この“be”には詩人のある思い入れがあったようで，その証拠に彼女は“is”に“be”という代替語を与えている。

例　That I shall love alway –
　　I argue thee
　　That love is life –
　　And life hath Immortality –
　　6．argue] → offer –　　7．is] → be–　　(P-549)

ディキンスンが“is”を“be”にしようとしたのは“argue”を“offer”に変えようとしたことと関係があるのかもしれない。しかし，興味あることは，『第1詩集』の編者が代替語“offer”を採用したにもかかわらず“be”は採用しなかったことだ。編者はおそらく“be”は古風すぎると思ったのだろう。そういえば，“Jessamines”や“blonde”の綴りも案外ディキンスンの古風好みの表われだと考えることができるかもしれない。

というように，上述の諸点の改変についてもまったく問題なしというわけではないが，ここでは，一応，比較的軽微な改変と考えて，考察の対象から除外することとする。

III．考察の対象とすべき改変

『第1詩集』に加えられた改変のうち，前項であげた改変を除けば，残る改変は54篇の詩にわたって105個所ということになる。[4] これら105個所の改変を形態的に分類すると次のようになる。

1．単語の改変：単語1語の改変はあらゆる品詞にわたって74個所ある。いくつか例をあげる。

Burst] → break, Story] → shipwreck, Sea] → waves, Man] → old, born] → sown, To] → On, Sire] → sweet, Why] → Then, uncertain] → all ignorant, Infiniter] → everlasting, And] →Or, Heft] →weight, Any] →anything, that] →his, themself] → the two, care] → can, last] → first, a] → the

2．複数語の改変：1個所で2語以上の改変がある場合は17例ある。

Within the meadows go] → Within the fields lie low, Frankfort Berries] → vats upon the Rhine, never lived – Enough] → did not love enough., Then Orient showed] → The East put out, like Orioles] → with fairy sails., in the Ground] → but a mound, The Other fly –] → and, one will flee.

3．語の追加：語が追加されることがある。

It's infinite contain] → Its infinite realms contain, How good to be in Tombs] → How good to be safe in tombs, Such a Day] → On such a day?, My Soul] → My soul's（動詞）

4．行全体の改変：1行全部が変えられる場合がある。

From Manzanilla come!] → Leaning against the sun!, For fear the numbers fuse] → Until their time befalls., Of this, that is between,] → Of time's uncertain wing, Just as the case may be –] → As Deity's decree, At Recess – in the Ring –] → Their lessons scarcely done;

5．語順の変更：語順を変えただけの改変もある。

And then, in Sovreign Barns to dwell –] → And then to dwell in sovereign barns

6．行分けの改変：押韻を正確にするなどのために，1行を2行に分けたり，2行を1行にまとめたり，1語だけを他行に移すなどがおこなわれている。

例 *Say* – Sea – Take *Me!*] → Say, sea,/Take me!

例 What then? Why nothing, /Only, your inference therefrom] → What then? Why, nothing, only/Your inference therefrom!

7．連の削除："Doubt Me! My Dim Companion!"（P-275）の第3連が削除されるなど，ある連または数行が削除されたものが5例ある。

8．複合的改変：上記の形態の入り混じった改変がある。

例 I only know – no Curricle that rumble there/Bear Me –] → I only sigh,–no vehicle/Bears me along that way.

例 A depth – an Azure – a perfume –] → An azure depth, a wordless tune,

IV.『第1詩集』の編者の改変の基調

ディキンスンの死後，トッドとヒギンスンの「創造的編集」(creative editing) を経て『第1詩集』が出版されるにいたったいきさつについては，ジョンスン (*Poems*, xxxix-xlvi) あるいはフランクリン (*Editing*, 3-26) に詳しく述べられている。

出版が具体化した時，編者，出版社ともに確信したことはディキンスンの詩は「絶対に改変が必要である」ということであった。(ジョンスン，*Poems*, xlv)　そして，事実，上に見たような改変がおこなわれたわけだが，ではこれらの改変が主として誰の手によっておこなわれたのかについては意見の分かれるところである。ジョンスンは改変の責任は主としてヒギンスンにあると考えた。これに対して責任はむしろトッドにあると考える者もいるが，「編者のどちらが詩のどの改変をおこなったかについては，わずかの例以外は，決定することは今や不可能である。編者の特権行使の責任は両者にあったのだ」(フランクリン，*Editing*, 25) とするフランクリンの判断が正しいと思われる。

『第1詩集』に加えられた改変が，主としてヒギンスンによるにせよトッドによるにせよ，改変の意図と基準が当時の読者の好みや基準に合わせることにあったことだけはまちがいない。ジョンスンもすでに次のように指摘している：

> トッドとヒギンスン大佐が編集の過程で従った原則はヒギンスンが設定したものであり，大部分当時の文学趣味の基準によっていた。そういうわけで，3冊の『詩集』に起こった改変は，あとになってみるとそれらがいかに不適切なものであったとはいえ，エミリ・ディキンスンの詩に当時の時代の感性が求めていると思われた種類の完成度を与えようとする努力のもとに，意図的，意識的に行われたのである。(ジョンスン，*Poems*, xliii)

ヒギンスンが当時の文学趣味にもっとも通じていた人のひとりであるとして，それでは彼の批評基準とはいったいどのようなものであったのだろうか。ディキンスンの詩に対するヒギンスンの最初の評言はディキンスンのヒギンスン宛の3通目の手紙から伺い知ることができる。「私の足取りが〈ぎくしゃくしている (spasmodic)〉とお思いのようですが，私は危機に瀕しているのです」「私は〈抑制がない (uncontrolled)〉とお思いのようですが，私には審判者がいないのです」(ジョンスン，*Letters*, 409) というディキンスンの言葉は，ヒギンスンにとって彼女の詩が滑らかなリズムや整った脚韻を欠き，用語やイメージが突飛であると思われたのであろうということを推測させる。

ヒギンスンの批評基準は，彼が1890年9月25日の *Christian Union* に "An Open Portfolio" と題して載せた『第1詩集』の出版予告記事，および，これとほとんど同じ内容の『第1詩集』の「序文」からも伺うことができる。そこでの彼の基調は，ディキンスンの詩の文学的統制，

洗練，完成の欠如に対する当然予想された批判を見越して，その批判を上回る長所を指摘し，強調するというものであったが，それは同時に彼自身がディキンスンの詩のどの点が当時の詩的基準から見て不十分だと思っていたかを示す結果となっている。ヒギンスンは，出版を意図しないで書かれた詩は完全な自由さを持つが「もちろん日常的に批評を受けなかったことからくる欠点はある」といって，まずディキンスンの詩が多くの欠点を持っていることを肯定する。彼女の詩には，力強い思想はあるが「文学的表現にあるべき統制と洗練さが欠けている」し，みごとな筆致や表現が見られる一方「全体としては不完全，不満足なところがある。」「不完全な脚韻があちこちに見られるが，これを非難することはブレイクの絵の欠点を批判するようなものだ。思想が人に息を飲ませる時，誰が音節を数えたりするだろうか。」「彼女の詩は，ほとんどの場合，根っこごと引き抜かれた詩なのだ。泥や露や石がついたままだが，そのまま受け取らなければならない。形式，リズム，脚韻，文法さえも無視した，気まぐれで，徹底的に反伝統的なものだが，彼女は自分自身の厳しい基準を持っていて，納得のゆく１語を得るまで何日も待つことがあった」などの言葉からも，ヒギンスンがディキンスンの詩は形式，リズム，脚韻，文法において不完全であり，文学的統制と洗練さを欠くという欠点を持っていると考えていたことがわかる。

Ｖ．改変の考察

『第１詩集』に加えられた改変のうち，考察に値すると思われる改変は54篇の詩の105個所にわたるものであった。この項では，改変内容を分析して，編者が何を意図して改変をおこなったかを推測してみたい。

１．ディキンスンの代替語句を採用した改変

『第１詩集』の編者は，ディキンスンの詩の改変にとりかかった時，まず詩人自身が原稿に書き込んだ代替語句に目を向けて，その中から適切と思われる語句を得ようとしたことはまちがいない。

考察の対象である54篇の詩，105個所の改変個所のうち，『集注版詩集』の採用稿および異稿で代替語句・行を持つ詩は32篇，代替語句・行を与えようとした個所は78個所，与えようとした代替語句・行は93である。この93語句のうち，『第１詩集』の編者が採用した代替語句・行は41であった。つまり，編者はディキンスンが提示した代替語句・行の約44％を採用して，改変をおこなったわけである。『第１詩集』の中のすべての改変が編者自身の独創や恣意によっておこなわれたわけではなかったのだ。これを逆に考えると，ディキンスンも時代の詩的基準をかなり意識しながら詩の推敲をおこなったということになる。

編者が詩人自身の代替語句・行を用いて改変をおこなったとしても，そこにはおのずから編

者自身の基準や好みは表われる。そして，その基準や好みは次項で見る編者自身による自由な改変から推定できるものと本質的には変わりはないと思われる。従って，編者の改変の意図を考察する場合，詩人自身の代替語句・行を用いての改変と編者の自由な改変とに分ける必要はないかもしれないが，少しばかり前者の場合についてここで言及してみたい。

改変にたずさわる編者の関心はまず脚韻を正しくすることにあったが，編者がディキンスンの代替語句・行を考慮しながら改変をおこなった場合は，押韻に関わる改変はわずか次の2例しかない。これはディキンスン自身の改変が語句中心であったためだと思われる。

例　Till Seraphs swing their snowy Hats –
And Saints – to windows run –
To see the little Tippler
From Manzanilla come!
16. From Manzanilla come!] → Leaning against the sun!　(P-214)

『第1詩集』の編者が“From Manzanilla come!”に対して詩人自身の代替行“Leaning against the Sun”を採用したのは，「太陽にもたれかかる子供」という壮大なイメージを好んだためとも思われるが，むしろ“run”-“come”という不完全押韻を完全にするために“Sun”を持つ行を選んだのだと推測できる。これは代替行を書き込んだときのディキンスンの意図にも沿う改変であったといえるだろう。

しかし，押韻に関係する次の例は，編者が詩人の意図に反してでも規則正しい押韻を採択したことを示す。

例　And even when it dies, to pass
In odors so divine,
As lowly spices, gone to sleep –
Or Amulets of Pine –
15. gone to sleep] → laid asleep/[laid] to sleep –
16. Amulets of Pine] → Spikenards perishing.　(P-333の異稿)

ディキンスンは，この詩を書き写して兄オースティンに送った時，「松の魔除け」よりも「滅びゆく甘松（香）」という強いイメージを好んだのであろう，代替行を採用した。ということは，彼女は押韻の規則性よりもイメージの斬新さを優先したということだ。しかし，『第1詩集』の編者は“Spikenards perishing”よりも“Amulets of Pine”を採用した。それが完全押韻を得るためであったことは疑う余地はない。

ディキンスンの代替語句を観察すると，彼女が難しい語句や表現を平易なものにしたり，隠喩やイメージを平明なものにしたり，衝撃性の強い語句をより穏やかなものに変えようとした

ことがわかるが（稲田，「創作の軌跡」2，115），『第1詩集』の編者にも同様の傾向が指摘できる。

たとえば，次の詩で編者が代替語“smiled”を採用したのは，それがより衝撃性の少ない語であったからだと思われる。

例　I asked no other thing –
　　No other – was denied –
　　I offered Being – for it –
　　The Mighty Merchant sneered –
　　4．sneered] → smiled–　　(P-621)

私が自分の命を差しだしてブラジル＝天国と交換して欲しいと言ったのに対して，偉大な商人＝神が「冷笑した」のと「微笑んだ」のとでは詩全体の意味が大きく変わってしまう。しかし，この点についてはすでに別稿（稲田，「創作の軌跡」2，113）で述べたので，ここでは強い響きを持つ“sneered”という語を“smiled”という比較的穏やかな語に変えようとしたディキンスン自身の意図が結果的に編者に受け入れられたという事実だけを指摘しておくにとどめておくこととする。

これと無関係ではないが，編者が改変用語句をディキンスンの代替語句から選択する時に見られるもうひとつの傾向として，情緒的あるいは感傷的で，より大衆受けのすると思われる語句を採用しているということをあげることができる。

例　Why, God, would be content
　　With but a fraction of the Life –
　　of the Life] → of the love　　(P-275)

編者がディキンスン以上に“love”という語を好んだことは，“That I did always love”（P-549）において，編者が“I never lived – Enough –”に対するディキンスンの代替語句“did not live”を採用したものの“live”を“love”に変えて“did not love”としたことからも明らかだ。この“love”と共に，know] → sigh, tremendous Chair] → eternal chair, take Eternity] → taste eternity, missile] → vengeance, played] → skipped などの改変もこの傾向を示しているいうことができる。

2．編者独自の改変

ヒギンスンとトッドはディキンスンの代替語句・行にとらわれない彼ら独自の判断にたつ改変もおこなった。『第1詩集』で編者独自の改変と思われるものは39篇の詩にわたって64個所あるが，これらは編者によって代表される同時代人の詩的趣味や基準を示唆するものとして大

変興味深い。

ディキンスンは一般的には誤用あるいは不自然と考えられる語法や文法を用いることがあったが，これらは当然編者の改変の対象となっている。本稿では，begun] → began や it's] → its などは考察の対象に値しない当然の改変として扱ってきたが，Themself are One] → the two are one，Ourself cannot decide –] → I never can decide における "Themself" "Ourself" なども当然の改変として問題にしないでおいてよいものだろうか。ディキンスンは全作品で "ourself" という語を14回使っているが，これらを改めて "ourselves" に変えようとしたりしたことは一度もない。ということは，ディキンスンは "ourself" という語が持つ語感，すなわち，royal "we" や editorial "we" の持つ重々しさ，古めかしさを十分意識してこの語を用いたということになる。編者にとっては，この語があまりにも古めかしいばかりでなく，無名の１女性の書いた詩にはふさわしくないと思われたのではないかという憶測も成り立つ。

編者は文法的誤りも矯正しようとした。次の改変例は文法的誤りの修正が押韻に関わった場合である。

例　Then a softness – suffuse the Story –
　　And a silence – the Teller's eye –
　　And the Children – no further question –
　　And only the Sea – reply –
　　13. suffuse] → suffuses　　16. Sea] → waves　　(P-619)

まず suffuse] → suffuses は当然の改変だ。ディキンスンがなぜ "s" を付けなかったかは理解に苦しむ。Sea] → waves については，主語 "the Sea" に対して "reply" は "replies" になるべきところだが，それでは "eye" と押韻しなくなるため，"Sea" を "waves" という複数名詞にして reply を残したということは容易にわかる。しかし，ディキンスンの擬人化された「海」には彼女の特別な思い入れがあったことを思う時，これは詩人の意にそぐわない改変であったかもしれない。

編者がディキンスンの詩の最大の欠陥はその不完全な脚韻にあると考えたことはほぼまちがいない。編者独自の判断による押韻に関する改変は16個所にわたっておこなわれている。

次の例は不完全押韻を完全にするために別の単語に変えたもっとも単純な改変である。

例　And if indeed I fail,
　　At least , to know the worst，is sweet!
　　Deafeat means nothing but Defeat,
　　No drearier，can befall!
　　12. befall] → prevail　　(P-172)

押韻を規則正しくしようとする企ては，このほかにも“extinguish me] → o'erwhelm me so”（P-172）のように単語を加えたり，“A depth – an Azure – a perfume] → An azure depth, awordless tune.（P-122）”のように語順を変えた上で語句をつけ加えたり，Say – Sea – Take Me!] → Say, sea,/Take me!（P-162）のように1行を2行に分けたり，At Recess – in the Ring] → Their lessons scarcely done（P-712）のようにまったく新しい行を与えたりするなど，さまざまな形でなされている。また，The Cornice – in the Ground –] → The cornice but a mound（P-712）のように，一般に好ましくないとされる同語押韻を避けるための改変もある。　脚韻の整備はしばしば他の語句との連動を引きおこす。

例　But, now, uncertain of the length
　　Of this, that is between,
　　It goads me, like the Goblin Bee –
　　That will not state – it's sting.

17. But, now, uncertain of the length] → But now, all ignorant of the length
18. Of this, that is between] → Of time's uncertain wing.　　(P-511)

編者は，“between”と“sting”の押韻の不一致に目を向けた時，同時に“Of this, that is between”が表現的にいかにも不自然であると思ったにちがいない。そこで前行の“uncertain”という語を取りこんでこれを“Of time's uncertain wing”とし，それと連動して前行を“all ignorant of the length”とした。しかしこの改変は，“Of this, that is between”という表現が持つディキンスンらしさを失わせるだけでなく，「時の翼」という常套句によってこの部分を陳腐なものにしてしまっている。

上例の詩“If you were coming in the Fall”（P-511）には，押韻を整えた結果ディキンスンらしさが失われたと思われるもう一つの例がある。

例　If I could see you in a year,
　　I'd wind the months in balls –
　　And put them each in separate Drawers,
　　For fear the numbers fuse –
　　8] → Until their time befalls.　　(P-511)

確かに“balls”と“befalls”で押韻は完璧になったが，その結果，「月の番号が溶けあってしまってわからなくなると困るので」という魅力的な表現は平凡に堕してしまった。

このような改変を情緒化，感傷化，平凡化と称するとすれば，all the time had leaked] → all the time had failed や Dip – and vanish like Orioles!] → Dip, and vanish with fairysails も同様に感傷化，平凡化の例だと言えよう。あるいはa freckled Maiden] → a humble

maiden のように，ディキンスン好みの形容詞 "freckled" が変えられたのもそうである。

次の例のように，ディキンスンを敬虔なキリスト教詩人に仕立てあげようとするかのような改変もこの延長線上にあると考えることができる。

例　The Seasons played around his knees
　　Like Children round a sire –
　　Grandfather of the Days is He
　　Of Dawn, the Ancestor –
　　5．played] → prayed　　(P-975)

編者は，この詩の第1連で詩人が "tremendous Chair" の "tremendous" 対して "eternal" という代替語を与えていることに導かれて，played] → prayed の改変を思いついたのかもしれない。しかし，"Like Children round a sire" という比喩の意図に反するにもかかわらず，このように「遊ぶ」を「祈る」に変えたのは，敬虔で素朴なキリスト教徒の読者層を意識してのことだと思われる。

編者は詩の内容が論理的に矛盾していたり，ナンセンスだと思われたりした時も改変の手を加えている。

例　So We must meet apart –
　　You there – I – here –
　　With just the Door ajar
　　That Oceans are – and Prayer
　　And that White Sustenance –
　　Despair –
　　45. meet] → keep
　　48. That Oceans are – and Prayer] → That oceans are/And prayer
　　49. White] → pale　　(P-640)

「あなたと私は別れ別れになっていますが愛しあっているのです」ということを繰り返し述べているこの詩は，John Donne の詩を思わせるが，"meet apart" は一種の矛盾統語法であって，決して "keep apart" となってはならないものだ。この改変は明らかに詩人の意図に反している。また，White] → pale の改変も平凡化である。

まとめ

『第1詩集』の編者による改変を，その形態と目的について考察した結果，次のことがわかった。

1．『第1詩集』に掲載された115篇の詩のうち，大文字，ダッシュ，句読点，連分け等に関

わる改変を除外すると，改変をまったく持たない詩は40篇（約35%）であった。

2．残り75篇の詩のうち，誤字の訂正，綴りの変更，語法の正常化に関わる改変を軽微な改変だとして除外すると，考察に値すると思われる改変は54篇の詩にわたって105個所となった。

3．これら105個所の改変を形態的に分類すると，1単語の改変74個所，複数語の改変約17個所，語句の追加，語順の変更，行の改変，行分けの改変，連の削除，複合的改変となる。

4．編者は，改変にあたり，ディキンスン自身が原稿に書き込んだ代替語句・行を考慮した。考察すべき54の篇の詩，105個所の改変個所のうち，原稿に代替語句・行のある詩は32篇，代替語句・行を与えようとした個所は78個所，与えようとした代替語句・行は93であった。編者はこの93語句のうちから41語句（約44%）を採用した。全改変の約39%は詩人自身の代替語句・行をもちいておこなわれたのである。

5．編者が詩人の代替語句・行から適切だと思う語句を選択して改変する場合も，編者独自の語句を用いて改変する場合も，編者の判断基準は共通している。編者の改変の努力は，脚韻を整えること，意味をわかりやすくすること，不自然だと思われる表現を改めること，衝撃性の強い語句を穏やかにすること，宗教的・情緒的・感傷的要素を強めることを目指しておこなわれたと推測できる。

6．編者による改変がすべてディキンスンの意図に反するものであるというわけではない。しかし，改変の結果，詩の意味や雰囲気が歪められたり，ディキンスンらしさが失われたりしたこともあった。

注

1）ヒギンスン自身の証言は彼の『第1詩集』出版予告記事と「序文」（バッキンガム3－9，13－14）にある。ジョンスンの『集注版詩集』（xxxix-xlvii）およびフランクリン（3-26）がこれを詳しく扱っている。

2）ただし，『第1詩集』の編者が『集注版詩集』の採用稿とは異なる原稿（異稿）を採用している場合はその異稿と『第1詩集』の詩とを比較した。『第1詩集』の詩のうち，異稿をもとにしている詩は，『集注版詩集』番号で，162，318，321，322，324，333，1332の7篇である。

3）『第1詩集』は6版を重ねたが，その途中で編者によって新たな改変をほどこされている。この『合本詩集』に収録されている『第1詩集』の詩はこの新たな改変を受けたあとのものである。

4）もちろん，考察の対象とすべき改変の個所の数は数え方によって変わる。そういう意味で，105個所という数は概数である。

引用・参考文献

Buckingham, Willis J., ed. *Emily Dickinson's Reception in the 1890s: A Documentary History.* U of Pittsburgh P, 1989.

Franklin, R. W., *The Editing of Emily Dickinson: A Reconsideration.* U of Wisconsin P, 1967.

Gesner, George, ed. *Collected Poems of Emily Dickinson: Original editions edited by Mabel Loomis Todd and T. W. Higginson.* New York: Avenel Books, 1982

稲田勝彦「創作の軌跡—エミリ・ディキンスンの詩の異稿研究(1)」『欧米文化研究』創刊号，1994.

---，「創作の軌跡—エミリ・ディキンスンの詩の異稿研究(2)」『欧米文化研究』第2号，1995.

---，「創作の軌跡—エミリ・ディキンスンの詩の異稿研究(3)」『欧米文化研究』第3号，1996.

Johnson, Thomas H., ed. *The Poems of Emily Dickinson: Including variant readings critically compared with all known manuscripts,* 3 vols. The Belknap Press of Harvard UP, 1955.

---,ed. *The Letters of Emily Dickinson,* 3 vols. The Belknap Press of Harvard UP, 1958.

Alterations in Emily Dickinson's *Poems, First Series*

Katsuhiko INADA

I have been engaged in a research into Emily Dickinson's creative activity by examining the suggested changes written into her manuscripts. My research has indicated that one of the possible intentions Dickinson might have had in giving the suggested changes was to try, whether consciously or unconsciously, to conform to standards of current literary taste. *Poems by Emily Dickinson* (1890) edited by Mabel L. Todd and Thomas W. Higginson is well known to have quite a few alterations made by the editors, and it seems very possible that those alterations show the literary taste and sensibilities of the poet's contemporaries represented by the editors. The purpose of this papaer, then, is to examine the alterations in *Poems, First Series,* guess the principles and literary taste that guided the editors in their editorial process, and compare them with Dickinson's intentions of her suggested changes.

1.After the alterations on capital letters, dashes, punctuation marks and stanza division in the 115 poems in *Poems, First Series* were excluded from alterations, the number of those poems which did not have any alterations was 40 (about 35%).

2.Then, after such alterations as those on wrong spellings, grammatical errors and so on were excluded from the rest 75 poems as minor and reasonable alterations, the number of those alterations which seemed to deserve close examination was 105 in 54 poems.

3.The editors made alteration by changing single words, plural words, adding words, changing word order and lines, omitting stanzas, and substituting whole lines.

4.In getting words or phrases for alteration, the editors made use of the suggested changes Dickinson had written into her manuscripts. About 39% of the alterations were made by taking the suggested changes into consideration.

5.The standards of judgment of the editors are the same both in the alterations made by using the poet's suggested changes and in those made by the editors' own words. The editors' efforts of alteration seem to have been directed toward giving right rhythm and rhyme, making the meaning of words or lines easier to understand, altering unnatural or awkward expressions to more sensible ones, changing too strong or shocking expressions into milder ones, and adding religious, emotional or sentimental quality.

6.Though not all the alterations offered by the editors seem to have been against

Dickinson's intention, there were cases where alterations caused distortion of meaning and Dickinsonian characteristics.